

平成を駆け抜ける大口町

人と人との絆

平成元年（1989）～平成10年（1998）

2019年4月30日に天皇陛下が退位することになり、翌5月1日に皇太子さまが新天皇に即位されるのに伴い、新たな元号に改められます。そこで、今月号から3月号までの3回にわたり、この平成の30年間の大きな出来事を振り返り、大口町の歩んできた歴史をたどっていききたいと思います。

1989年
平成元年

- 大口町総合運動場竣工



- 昭和天皇崩御（1月7日）、皇太子即位、『平成』新時代へ空前のバブル経済好景気が続く
- ふるさと創生事業
- 消費税施行、税率は3%

1990年
平成2年

- 心身障害者小規模授産所開設
- 町民会館・商工会館竣工
- 中学生海外派遣制度開始



- 礼宮文仁親王がご結婚
- 第1回大学入試センター試験実施
- 秋山豊寛さん、日本人初の宇宙飛行

1991年
平成3年

- 鈴木博5代目町長就任
- ごみゼロ運動始まる
- シルバー人材センター発足



- バブル経済はじける
- 火山活動が続く長崎県雲仙・普賢岳で大規模火砕流や土石流が発生
- 千代の富士が引退 若花田・貴花田人気で「若・貴時代」を築きあげる

1992年
平成4年

- リフレッシュリゾート助成事業開始
- 防災行政無線開局
- 大口町イメージソング
- 「ほほえみを花束にして」発表



- PKO協力が成立、自衛隊をカンボジアに派遣
- バルセロナオリンピック・アルベルビル冬季大会で日本勢が活躍
- 毛利さん、米スペースシャトル「エンデバー」で宇宙飛行

わかしゃち国体（平成6年）

第49回国民体育大会（わかしゃち国体）が愛知県で開催され、大口町と扶桑町の2町でソフトボール大会成年男子2部（10月30日から11月2日の4日間）がおこなわれました。

全国から地区予選を勝ち抜いた10チームのうち5チームが会期中大口町に滞在。大口町ソフトボール協会が中心となって選手のみなさんのおもてなしをすることになりました。

町内に宿泊施設がないため、2つの行政区が1チームを受け持ち、学共を使って受け入れ、住民の皆さんが親身になって寝具や食事のお世話をしました。

「大口町にとっては初めての出来事。物差しや青写真が全くないため、本番まで不安と戸惑いの連続でした。特に住民の皆さんとは何回も話し合いがおこなわれ、意見がぶつかることもしばしばありました」と、担当職員は当時を振り返ります。

それでも、いざ選手の皆さんが大口町入りすると大口の住民パワーで素晴らしいおもてなし。到着日の歓迎会やグラウンドの整備など、毎日のきめ細やかなお世話は、選手のみなさんの力の源になりました。「まるで地元で試合をしているようでした」

1993年
平成
5年

- 「デイサービス事業開始」
- 「健康のまち」宣言



1994年
平成
6年

- 広報おおぐちB5↓A3サイズへ
- わかしやち国体記念運動公園完成
- 第49回国民体育大会（わかしやち国体）
- ソフトボール成年男子2部開催



1995年
平成
7年

- 都市計画マスタープラン策定
- 救援物資輸送班神戸へ
- 特別養護老人ホーム（御桜乃里）誘致
- 第5次総合計画策定

1996年
平成
8年

- 堀尾跡公園竣工
- ふれあいまつり96始まる



1997年
平成
9年

- 文化財収蔵庫竣工
- 大口町全体が楽しめる祭りを作ること
- 「大口町まつり創世研究会」が立ち上がる
- ライフおおぐちの発行（全戸配布）



1998年
平成
10年

- 大口町ホームページ開設
- 丹羽消防署大口出張所開設
- 大口西児童センター竣工
- 人口2万人達成
- 健康文化センター竣工
- 河北グラウンド竣工



- 皇太子さま小和田雅子さんとご結婚
- 北海道南西沖地震、奥尻島に10mを超す津波が襲つ
- 10チームで発足したJリーグが人気沸騰
- 平成の米騒動（日本列島、冷夏、長雨で異常気象）
- 史上初の外国人横綱曙が誕生

● 中華航空機墜落、264人死亡

● 税制改革法成立、消費税5%へ

● 日本初の女性宇宙飛行士向井千秋さん宇宙へ

● オリックスのイチロー2000本安打

● 阪神淡路大震災、死者6308人

● 地下鉄サリンなどオウム事件

● 大リーグで野茂英雄大活躍、日米で旋風を巻き起こす

● 病原性大腸菌O157食中毒騒動

● 五輪100周年のアトランタ大会

● 消費税「5%」に引き上げて景気減速

● 2005年万博開催地に愛知県瀬戸市が決定

● サッカーW杯へ日本初出場決める

● 新たな社会保険制度「介護保険法成立」

● 長野オリンピック

● 「羅生門」の黒沢明氏死去

「心」のおみやげたくさんありがとう」と、感謝の言葉をもらいました。最後は骨を折ったスタッフの胸上りテープで締めくくり、国体選手・大口町スタッフが一体となりました。

「この行事が、この先続く大口町の、住民と行政が手を取り合う『協働』の歴史の幕開けだったように感じます」と、当時の担当職員。限られた時間でしたが、大口町がひとつになったような達成感が得られた貴重な体験でした。



▲上小口を走る炬火リレー

阪神淡路大震災（平成7年）

1月17日、まだ日の出も迎えていない早朝5時46分、真つ暗な中突然襲つた大震災。淡路島北部を震源としたM7.3の大地震は、全国にニュース映像が流れ、その被害の大きさが衝撃を与えました。



▲役場を出発する2台の救援物資搬送車

「自宅を出るとき、当時1歳だった我が子の寝顔を見て、行けば何が起ころかわからないと覚悟を決めたのを覚えています」と、物資輸送に加わった職員は当時を振り返ります。

「緊急物資搬送車」という手作りの旗をトラックの前面に掲げ、一路神戸に向かいました。

神戸市東灘区に入ると、景色が一変しました。長屋がバタバタと倒れ、高速道路の橋脚が折れていたりビルが倒れていたり。大渋滞をくぐり抜け、指示された神戸市中央区役所に到着したのは深夜3時すぎでした。その晩は足の踏み場のない区役所の階段の踊り場で寝かせてもらいましたが、しばしば余震に襲われ改めて災害の恐怖を身をもって体験された

そうです。今でこそ数々の災害の教訓から行政やNPOの物資の受け入れ体制が整備されてきていますが、当時はまだシステムもなく、区役所は混乱を極め、物資も「その辺に置いておいてください」と言われたそうです。

帰り道、火災による甚大な二次被害に遭った長田区を通ると、まるでまちが爆撃を受けた後のように変わり果てている光景が広がっていました。特に印象的だったのは燃えた後のすさまじい臭気だったそうです。「この経験により、当たり前の生活が当たり前ではない、お互い助け合わなければ生きていけないという人生訓を得ました。これ以後、災害の当事者でなければ簡単に共感の言葉を

口にしていけないといつも考えています」実際に目にしたからこそ得られた貴重な教訓。大口町の災害に対する心構えの礎が築かれたきっかけとなりました。

取材にて

大口町に現在ある施設がこの10年で多く整備されました。総合運動場、市民会館、堀尾跡公園、健康文化センターなどが次々と竣工し、大口町の豊かな暮らしの土台が作られました。それと同時に、人と人とのつながりが改めて見直された10年でもありました。わかしゃち国体の開催や阪神淡路大震災の救援物資輸送などに代表されるように、人と人が手を取り合って助け合ったり、何かを作り上げたりする精神がこの時期に育まれました。大口町の「協働」の取り組み、今も続く東日本大震災の被災地である南三陸町への職員派遣による支援などの災害に対する意識が、この10年で芽が出て育ってきたように感じます。

次回は、平成11年から20年までを振り返ります。

TOPIC

平成4年（1992年）

町政30周年を記念してイメージソングを作ることになりました。

公募で選ばれた歌詞にメロディーをつけてもらうよう、大物女性シンガーソングライターに依頼をしたのですが、彼女は普段メロディー先行で作詞作曲していたため、できあがっている歌詞に曲をつけることは難しく、残念ながら実現しませんでした。その後、

堀内孝雄さんが曲をつけてくださり、「ほほえみを花束にして」が完成。もし、この話、実現していたら、

大口町のイメージソングがニューミュージック系の優しくしっとりとした歌声の曲になっていたかも!?

